

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	津田 洋子
論文題目	フランス語現象文の意味論 – IL Y A/VOILA構文の分析を通して –		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、フランス語のSN qui SV構文 (名詞句+関係代名詞主格+動詞句) が、統語的には単なる名詞句であって主動詞を持たないにもかかわらず、眼前の事態を描写する現象文として解釈可能となるメカニズムを明らかにしようとするものであり、全5章および結論部から構成される。分析にあたっては、現象文としての用法も備えた提示表現il y aおよびvoilà、さらにc'estとの対照分析を通して、分析対象であるSN qui SV構文の機能を分析している。</p> <p>まず第1章では、対象となるSN qui SV構文およびその他の提示表現に関する先行研究をまとめ、それらの問題点を指摘した上で、本論文が取り組む2つの問いを明らかにしている。すなわち、(1) SN qui SV構文はすべての用法を同じ単一判断の文として考えて良いのかどうか、(2) 現象文として用いられるSN qui SV構文はどのようにして文として成立するのかという問いである。続く第2章では、本論文の分析が依拠する理論的枠組みとして、三尾 (2003) による文の主題構造、Prince (1981) やChafe (1987) による指示対象の情報特性、Carlson (1977) の存在論、そして東郷 (1999など) の談話モデルを提示し、分析方針を示している。</p> <p>第3章は、SN qui SV構文と提示表現il y aおよびc'estの共起関係を分析することで、SN qui SV構文には「課題の場」と「発話の場」という解釈領域の違いによって2つのタイプが存在することを明らかにしている。聞き手の問いかげや発話状況などから同定すべき課題が設定されているときには提示表現c'estやil y aだけではなくSN qui SV構文も使えるのに対し、課題が設定されていないときにはil y a構文のみ使うことができ、SN qui SV構文は使うことができない。一方で、課題が設定されていないときであっても、発話の場でたった今知覚した事態を表すときにはil y aだけではなくSN qui SV構文を使うこともできる。本章ではさらに、il y a構文のうちil y a現象文はトピック・コメント構造を許容せず、話し手の知覚領域で生じたばかりの事態を表すことを明らかにしている。</p> <p>第4章は、指示対象の情報特性および出来事連鎖のシナリオという観点から、il y aとvoilàを現象文として用いたときの事態の提示メカニズムの違いを分析している。その結果、il y a現象文は話し手の知覚領域に新たな事態が存在することを断定するのにに対し、voilà現象文はシナリオを前提とする構文であり、発話状況領域における場面転換を表すという点で、断定のメカニズムが異なっていることを明らかにしている。さらに、これらの構文との対照により、SN qui SV構文が話し手による事態の提示および事態を成立させる時空領域の提示を欠いている点も論じている。</p> <p>第5章は、名詞句に付けられた限定詞の観点からSN qui SV構文が現象文として解釈されるメカニズムにアプローチしており、とりわけ、たった今知覚したばかりの事態に含まれる対象に対して定冠詞が使われる要因を分析している。分析の結果、SN qui SV構文における名詞句は指示対象の存在前提が発話現場に適合するフレームから得られるため定冠詞が使用可能となる一方で、出来事連鎖のシナリオは持っていないことが明らかとなった。さらに、これらの特徴に加えて、SN qui SV構文は事態に対する断定を欠いているため、この構文で表現される事態はその発生自体が想定外であり、驚きを表現する構文として解釈されることを主張している。</p> <p>結論部では、第3章から第5章までの分析結果にもとづき、第1章で設定した問いに答えている。すなわち、(1) SN qui SV構文には課題の場で解釈されるものと発話の場で解釈</p>			

されるものの2タイプがあるため、同じ単一判断の文として扱うべきではなく、(2) SN qui SV構文は、課題の場で解釈されるときには、文を断定する要素がなくとも聞き手によって設定された課題に対する答えとなるため文として成立し、発話の場で解釈されるときには、断定を欠き、聞き手が解釈するための枠組みも用意されていないことから、共有知識領域では想定されていない属性を持つ個体や予想外の事態の出現を表す表現として解釈することができるため、文として成立すると結論づけている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、フランス語のSN qui SV構文が統語的には名詞句であって主動詞を持たないにもかかわらず文としての機能を果たす機序を明らかにすることを目的としている。第1章で提示されるこの研究目的は、同じ単一判断の文とされるil y a、voilà、c'est等の提示表現を用いた構文、擬似関係節、さらには日本語学における喚体句研究等も参考にした上で提示されており、取り組む問題の重要性を説得的に示していると言える。

第2章では使用する概念・理論モデルを提示している。文の主題構造については三尾(2003)の陳述論を参照し、名詞句とその指示対象との関係については、Prince(1981)とChafe(1987)の情報特性およびCarlson(1977)の存在論を導入し、談話における文解釈については東郷(1999など)の談話モデルを援用している。3章以降で展開される分析に必要な理論的枠組みを過不足なく提示している点で適切なまとめとなっている。

第3章では提示表現c'estおよびil y aとの共起関係を分析することにより、SN qui SV構文には「課題の場」と「発話の場」という異なる解釈領域で解釈される2つのタイプがあることが論じられている。「課題の場」においては、本来的に同定機能をもつc'estはもちろんのこと、SN qui SV構文も使うことができ、聞き手側の解釈次第でil y aも可能であることを示している。さらに、たった今知覚したばかりの事態を述べる「発話の場」であれば、提示表現il y aに加えてSN qui SV構文も使用可能であることを明らかにした点は本論文の大きな成果であると言える。本章ではさらに、il y a構文を3つのタイプに分け、il y aが現象文として使われたときの特徴を文の主題構造の観点から明らかにしている。この分析は本論文の主題であるSN qui SV構文の分析からはやや逸脱気味ではあるが、現象文としてのSN qui SV構文の特徴を明らかにする上で必要な議論だと考えられる。

第4章は、存在と直示の違いとして理解されることの多いil y aとvoilàを、表される事態に状態変化が含まれるかどうか、出来事連鎖のシナリオを持つかどうかといった観点から比較し、さらにvoilàが使われる構文のうち、voilà que節、voilà SN属詞といった類似構文も分析対象としている。豊富な用例を元に、類似構文の間に見られる相違点を明確に示している点は非常に高く評価すべきだが、フレームやスクリプト等の概念を用いた出来事連鎖のシナリオの分析には直観的過ぎると見受けられる部分があり、シナリオの有無が峻別可能という見方には議論の余地も残ると考えられる。今後、ある対象がフレームに含まれるかどうか、出来事連鎖のシナリオに含まれるかどうかといった点の分析をさらに洗練させることが期待される。

第5章は、第4章で導入したフレームやスクリプトにもとづいて、現象文としてのSN qui SV構文の中で用いられる限定詞の機能を詳細に分析している。指示形容詞付きの名詞句は出来事から離れても指示可能なトピックとしての性質を備えており、現象文の中では使えないという指摘は先行研究にもある。しかしその議論と関連づけながら、たった今知覚したばかりの対象であるのに定冠詞が使えるのはなぜなのかという問題に答えを与えている点は本論文の主要な貢献の1つである。この現象文の指示対象は発話現場に適合するフレームによって存在前提を与えられているため定冠詞で指示されるが、出来事連鎖のシナリオは持っていない。そのため、事態の発生そのものは意外なものとして解釈され、結果としてこの構文による現象文は驚き等を表す機能を持つに至っているという結論は妥当なものである。

結論部では第3章から第5章の議論を総括し、文としての断定を欠くSN qui SV構文が文としての機能を持つ基盤を「課題の場」と「発話の場」という現場密着性に求める結論を下している。本文中にはこの結論以外にも、3章のil y a構文の分類と分析、

4章で展開されているvoilàを使った構文の詳細な分析、5章の不定冠詞に関する議論等も含まれているため、それらを含めた総合的な結論や今後の展望としてはもう少し重厚なものが期待されるころではあるが、第1章で提示した本論文の中心的な問いに対して適切かつ説得的に答えている点は極めて高く評価することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年12月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降